

柳野地区の活性化に関する研究

—住民案の持続可能性の側面から—

1140494 渡邊 大貴

高知工科大学マネジメント学部

1. 概要

高知県吾川郡いの町西部にある小川柳野地区（旧吾北村）は、深い山々に囲まれた人口およそ 180 人の小さな集落である。地区住民の 6 割を 65 歳以上の高齢者が占め、今後の集落の維持が困難となりつつある限界集落である。この集落を今後どのように活性化していくのか、実現性があり、かつ持続可能な案を立案することが求められている。

2. 研究背景

高知県吾川郡いの町の西部の山間部にある集落、小川柳野地区。高知市中心部からは、国道 33 号、同 194 号、同 439 号経由で約 40km、車で 1 時間のところにある。住民の数は平成 24 年 12 月現在、男性 90 人、女性 90 人のあわせて 180 人（ただしうち 17 人は老人ホーム等の施設入居者）。そしてこの 180 人のうち 109 人が 65 歳以上の高齢者であり、その割合は実に 61%にのぼる。社会学者の大野晃氏が提唱した限界集落の定義は「65 歳以上の人口が全体の 50%以上」であり、柳野地区はこれを大きく上回っているため、限界集落であるといえる。

高齢者が多くなった集落の維持、活性化を図るため、柳野地区の住民はかねてより自主的に取り組みを行ってきた。

平成 8 年、「明るい柳野を創る会」を設立。農業や地域活動の推進と集落の美化、環境の整備等を行い、住みよい地域づくりを目的とするものである。そして、この「明るい柳野を創る会」が平成 17 年に立ち上げたのが農産物直売所・軽食処の「ふれあいの里柳野」である。

「ふれあいの里柳野」は他の施設を解体して出た資材などを活用し、地元住民が協力して作り上げた。運営も住民たちが行っており、週 5 日の営業である。直売所の下を流れる川には水車を設置。これは直売コーナーで販売するそば粉を挽くのに利用するとともに、観光資源としての役割も期待しているものである。

「ふれあいの里柳野」の内部に入るとまず直売コーナーがあり、前述のそば粉や地元で採れたシイタケや白イモなどの

農産物が並んでいる。そして奥には厨房とテーブルがあり、柳野の地元の食材を使った料理を味わうことができる。この料理は、岐阜県から移住してきた野菜ソムリエの松岡昭久氏が調理を担当している。また、「ふれあいの里柳野」ではそば打ちやこんにやく作り、炭焼きなどの体験も行っている。

「ふれあいの里柳野」のほか、柳野地区では「新そばとこんにやくまつり」「こうぞはぎと懐かしの食体験」といったイベントをそれぞれ年 1 回開催。他にも周辺の山での「ミニ 88 か所」めぐりを実施するなど、活発に活動する地区の住民からは、柳野をなんとか盛り上げたいという熱心な想いが伝わってくる。

こうした住民の積極的な姿勢を受けて、柳野地区は平成 26 年度からの高知県の「集落活動センター事業」の対象となった。

この「集落活動センター事業」は、地域住民が旧小学校や公民館などを拠点に、それぞれの地域の課題やニーズに応じた活動に取り組むもの^[1]であり、対象地区には 3 年間で 6,000 万円の補助金が支給される。

柳野地区の住民は、この補助金の効果的な使い方を検討するため、平成 24 年度から月 1 回のペースで、住民が集ってのワークショップを開催してきた。そして、平成 25 年 11 月には、以下の住民案がまとまってきた。

- ①柳野公民館の改修
- ②ふれあいの里柳野の改修
- ③太陽光及び小水力発電事業
- ④猪肉処理場の新設
- ⑤コシアブラ園及び和ハーブ園の新設

①は、地区にある柳野公民館を改修し、集落活動の拠点となる事務所を整備。事務作業や住民の会合などを行いやすいようにする。トイレや階段もより使いやすいうように改修する。

②は、ふれあいの里柳野を改修し、新たにピザオーブンや製粉機などの調理器具を導入する。これにより、地区の素材を活かした新たな料理のメニューを開発し、より多くの顧客

獲得につなげようとしている。

③は、発電によって生まれた電気を電力会社に売り、その収入を集落活動センターの諸経費にまわそうというものである。また太陽光発電については、発電装置を耕作放棄地に設置する予定である。

④は、イノシシの解体処理場を新設し、地区内で深刻となっているイノシシ被害を減らすとともに、山の幸として新たなメニューの開発に取り組みたいとしている。

⑤のコシアブラ園は、もともと柳野に自生していて、イベントで提供する際にも好評のコシアブラを育成するものである。また和ハーブとは、江戸時代以前から日本に土着していた有用植物のことをいい、柳野地区は数多くの良質な和ハーブが自生している。それらを活かして新たに和ハーブ園をつくり、和ハーブの育成や観光資源としての役割を期待するものである。

これらの案を見ると、ある問題点が浮かび上がってきた。それは、これらの案が、あくまで現在の予算の中でできるかどうかということ判断されていて、全体として持続可能な案なのか見極めされていない、という点である。たとえ住民がやりたいと思ったことであっても、継続的に外貨をかせぐことができ、住民の暮らしを維持することができる案でなければならない。

3. 目的

本研究では、現在の集落活動センター事業において、住民案が事業全体として持続可能なプロジェクトとなっているのか確認し、必要であればその改善案を示すことを目的とする。

4. 研究方法

日本の他の地域での地区活性化の成功事例を探し、柳野地区と比較検討することにした。

比較対象として選んだのは、東北・山形県金山町の杉沢地区にある「暮らし考房」である。ここは柳野よりもさらに小さい集落ながらも（図 4-1）、多くの訪問客を集め、活性化に成功していた。ここであれば柳野地区の活性化にあたり参考になると考え、訪問し、インタビューすることとした。

本研究では平成 25 年 12 月に暮らし考房を訪ね、主宰者の栗田和則さんにお話を伺った。

杉沢地区のある山形県最上郡金山町は、山形県北東端、秋田県との県境に接する人口 6,200 人あまりの小さな町である。林業が盛んな町として知られ、金山産の杉は「金山杉」

というブランドで知られている。また町の中心部には古くからの町並みが保存されており、美しい景観を楽しみながらの散策ができる。

山形県の県庁所在地である山形市から、山形新幹線に乗り約 50 分で新庄市に到着、そこから路線バスに乗って国道 13 号を北上、30 分ほどで金山町の中心部に着く。さらにそこからタクシーで 15 分ほど走ると、暮らし考房のある杉沢地区である。

杉沢地区は戸数 12 戸、人口 39 人の小さな集落である。周囲は山に囲まれ、冬は豪雪に見舞われる。

	杉沢地区 (平成25年3月31日現在) ^[2]	柳野地区 (平成24年12月20日現在)
主要都市からの距離	山形市から北へ90km	高知市から北西へ40km
戸数	12戸	90戸
人口	39人	180人

図 4-1 杉沢地区と柳野地区の統計比較

図 4-1 では柳野地区と杉沢地区それぞれの主要都市からの距離、戸数、人口を比較している。主要都市からの距離は杉沢地区の方が遠く、戸数は杉沢地区の方が少なく、人口も杉沢地区の方が少ない。したがって、地理的な問題や担い手の問題など、杉沢地区の方が活性化していく上で厳しい条件下にあると考えられる。

そんな杉沢地区に 1 軒の立派なログハウスがある。栗田和則さんが妻のキエ子さん、長男の和昭さんと営む「暮らし考房」である。

平成 5 年にオープンしたこの施設は、宿泊やカフェの機能を持ち、さらに藍染めやメープルサップづくりなどの体験を行うことができる。交通アクセスが決してよいとは言えない山あいの小さな集落にあるにも関わらず、年間 2,000 人も人が訪れるという。こうした功績が称えられ、暮らし考房はさまざまな賞を受賞している。（図 4-2）

どうして杉沢地区にこれほど大勢の人たちが訪れるようになったのだろうか。

このような小さな集落の活性化に取り組もうとしたとき、課題となるのはどうやってよそから人を呼び込めるか、である。都市の場合ならまだしも、中山間地域の小さな集落の認知度はほとんど期待できない。そして、より多くの人々を呼

平成14年度	農林文化振興myビジョン 最優秀賞
平成18年度	グリーンツーリズム大賞 優秀賞
"	山形県男女共同参画社会づくり功労者知事表彰 チャレンジ賞
"	山村力コンクール「山村力」発揮リーダー賞 最優秀賞
平成20年度	大日本農会 緑白綬有功賞

図 4-2 暮らし考房が受賞した賞

び込むためには他県にも認知を広める必要がでてくる。周辺地域、そしてさらに全国へのプロモーションというのは決して容易なことではなく、柳野地区の活性化を考える際にも大きな課題となっていた。

暮らし考房の事業成功の背景には、果たしてどのようなプロモーションを行っていたのか。この点を中心に、これまでの活動の経緯など、インタビューで事業の詳細をお聞きした。

訪問したのは平成 25 年 12 月 6 日。この日は 12 月とはいえ天候も比較的温暖であり、積雪は見られなかったが、道路脇に立ち並ぶ路肩を示すための赤白のポールが、豪雪地帯であることを物語っていた。

到着した暮らし考房には、白壁の日本家屋風のつくりが印象的な 2 階建ての立派なログハウスと、築 200 年という大きな母屋があった。ここでの事業として、まず宿泊客の受け入れがあり、B&B (ベッドアンドブレックファースト) 方式の宿泊サービスを提供している。1 泊朝食付きで 3,500 円とリーズナブルな料金設定であり、普通のホテルでは物足りないという人にもすすめられる。そして「メープルカフェ 楓」の運営もしており、自家製のメープルサップを使ったメニューを楽しめる。そして栗田さんの妻・キエ子さんによる本藍染及び草木染体験や、長男・和昭さんによるチェーンソーアート等の木工体験なども行っている。

では、なぜこの杉沢地区でこうした取り組みを行うことになったのだろうか。

主宰者の栗田和則さんは昭和 19 年 (1944 年) のお生まれで、16 歳のときに家業を継ぎ¹⁾、稲作と林業に従事した。

しかし直後に始まった米の減反政策や、昭和 50 年代からの木材価格の下落といった問題に直面した。また、雪深い杉沢では、冬の間は農林家の人たちは出稼ぎに出ており、冬に何

かできないのか考える必要もあった。栗田さんは、杉沢地区でどう暮らしていくかを真剣に考え、さまざまなことにチャレンジし、試行錯誤を重ねてきた。自分たちのいる環境の中で、よりよい暮らしをしていくことを模索し続けてきたのである。

そして 1973 年に始めた⁴⁾のがナメコの栽培。現在でも続けていて、自家製のメープルサップで漬けた瓶詰めのものを暮らし考房で入手することができる。これをお土産としていただいたが、傘の大きい立派なナメコが瓶いっぱいに入っていて、素朴な味わいを楽しむことができた。

また、1985 年にスタートした⁴⁾のがタラの芽の栽培であるが、こちらは後の活動に大きな影響を与えることとなる。

当時、タラの芽は高価な商品で、後発の産地は参入するのがなかなか難しかったが、栗田さんらは規格を厳しくするなど品質のよさにこだわり、またひと目で金山産のものとわかるシールを貼るなどしてよく目立つようにするなど、創意工夫を重ねた。

やがてタラの芽事業が軌道に乗り、1993 年には⁴⁾、かねてよりタラの芽 1 パック当たり 50 銭を積み立てていた資金で、地区の女性たちのヨーロッパ旅行研修を実施した。そして、訪問先に農家民宿を体験し、暮らし考房での民泊という発想につながったのである。

また、これまでの文章でたびたび出てきたメープルサップの採取及びその加工品づくりも、栗田さんが長年力を入れてきた取り組みである。メープルサップとは、イタヤカエデの木から採取する樹液のことである。きっかけは、20 年以上前に知人の哲学者・内山節さんから「メープルシュガーでコーヒーが飲みたい」と言われたこと。イタヤカエデの木は周囲に豊富にあったため、研究を開始。試行錯誤を重ねた末、メープルサップを 40 分の 1 ほどまで煮詰めたメープルシロップ「楓の雫」を完成させた。このメープルサップは、イタヤカエデの木から採取できる時期がとても短く、そして木への負担を考えて採れる量も少ない。国産のメープルサップというのは大変貴重なものである。栗田さんが始めた当時、国内での生産はなく、カナダの特産品として知られているものくらいしかなかった。栗田さんの努力の甲斐あって、杉沢地区はメープルサップのメッカとなったのである。

こうした様々な取り組みを行う中で、1993 年の 1 月に完成した暮らし考房は、農村での豊かな暮らしを考え、創造と継

承をしていく活動の場としてオープンした。農業、林業、生活体験に関わる研修の受け入れや、草木染めや木工体験、カフェなどの事業を行っているわけだが、メープルサップをはじめとする、これまで生み出してきた新たな産物が、ここに人々が訪れる要因となっていると考えられる。訪問した際、栗田さんのご厚意で原液のメープルサップをいただいた。色は無色で透明である。飲むと口の中にほのかな甘みが広がり、少し元気が出たような感覚になった。カエデの木に付けた傷から、ぼたり、ぼたりと一滴ずつしか採れないメープルサップ。それをグラスに一杯分いただいたのである。ありがたみを感じずにはいられなかった。自然の恵みへの感謝、そしてじっくりと時間と手間をかけて採取しておられる栗田さんへの感謝の気持ちを抱いた。きっと訪れた人たちは同じような感覚になっているのではないだろうか。ここにでも来ない限りまず口にできないような希少なもの。そして努力や手間が感じられるもの。訪れる人たちにとって、これは大きな価値になっているはずである。決して、単に田舎に泊まるということだけではないのだ。

また、暮らし考房で妻のキエ子さんが担当している藍染め体験だが、藍染め自体は実はこの土地ならではのものは無い。もともとキエ子さんが趣味で始めたのがきっかけであり、それを高校生などに教えるようになったのである。栗田和則さんは「何か一つでも自分の得意なことを見つけるべき」とおっしゃっていた。キエ子さんの藍染めは、得意なことが乗じて、山里にお客さん呼び込むまでに至っている。暮らし考房のコンセプトは先述の通り「農村での豊かな暮らしを考え、創造と継承をしていく」ことだが、キエ子さんの藍染めはまさにそのコンセプトに沿ったことである。藍染め自体はこの土地にはなかった“新しい”ことであっても、ここでの豊かな暮らしを考え、創意工夫してできることをやっていく。その姿自体が「この土地ならではの」ことであって、周囲から来た者たちには輝いて見えるのだ。

長男の和昭さんが行っているチェーンソーアートも同様である。ただし、当然ながらこれらはご本人の優れた手腕によって成り立っているものであり、単に好きだから、ということ成り立っているのではない。ご本人たちの努力があってのことである。和昭さんが丸太を材料にチェーンソーで作上げた作品の数々は、本当にこれがチェーンソーを使ってできたものなのかと、驚くばかりのものである。暮らし考房

に多くの人々が訪れる理由は、このように山での豊かな暮らしを体現している人たちと触れ合うことができ、その暮らしを体験できるからである。

栗田さんの活動は、自身のことだけにとどまらない。暮らし考房だけではなく、「共生のむら すぎさわ」と称し、杉沢地区全体の活性化に取り組んできた。地区住民と協力し行った活動は実に15にわたり、「山村に暮らす自信と誇りと希望を創造する地域づくり」を目的として、さまざまな活動に取り組んできた。(図4-3)

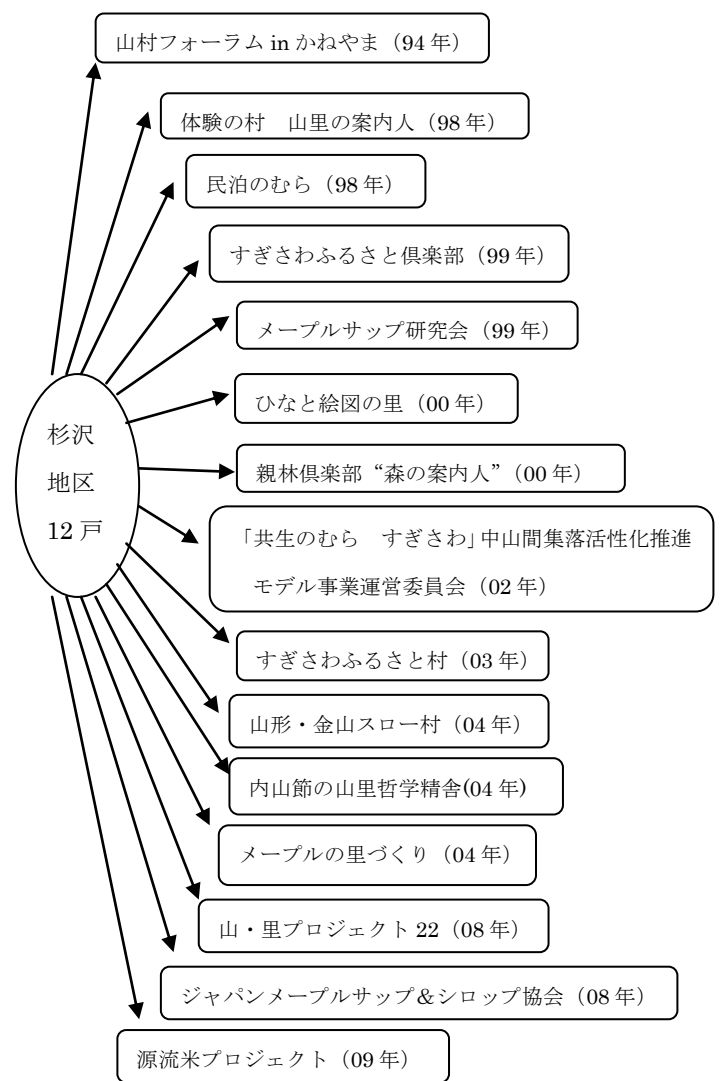


図4-3 共生のむら すぎさわの取り組み (カッコ内開始年)

1994年に始まった「山里フォーラム in かねやま」は、哲学者・内山節氏を招いての山里哲学講座を定期的に行うものである。栗田さんがかねてより内山氏と親交があったため実現したものである。山里での豊かな暮らしづくりについて

て、哲学の観点から考えている。

「体験の村 山里の案内人」は1998年にスタート。暮らし考房をはじめ、「生活資料館」「やまと工房」「片桐農園」「森林倶楽部 森の案内人」といったあわせて5つの施設及び団体が、山里での暮らしの体験を実施するものである。また、この中から暮らし考房と片桐農園、生活資料館の3軒は、民泊にも取り組んだ。（「民泊のむら」事業、ただし暮らし考房以外は7〜8年ほどで民泊を取りやめている。）このとき栗田さんは、あくまでも住民が各自の自宅で自分の得意なことをする、というスタンスにこだわった。例えば地域の暮らしを一堂に集め紹介するような大きな施設をつくって、そこで教える、というような考えはしていない。あくまでも自分の家に来てもらって教える。そうすることで、各家のもつ細かな違いが生かされて個性が生まれる。このほうが訪れる人の興味を引くはずである。また、自分の家で教えることによって、こうしてこれからもここに住み続けようという気持ちになれる。この場所に住むことへの自信と誇りが生まれる。

1999年開始の「すぎさわふるさと倶楽部」は年会費15,000円を納めた会員に年5回杉沢の季節の産物を送るものであり、すぎさわ源流米、山菜セット、きのこセット、無農薬野菜セットなどを季節にあわせて届ける。遠方にいる人でも杉沢の恵みを味わうことができる。

その他、森のきびしさや美しさを教えるボランティアガイド「森林倶楽部 森の案内人」や、空き家を共同所有して活用する「山形・金山スロー村」など、事業は多岐にわたる。

このように栗田さんをはじめ、杉沢地区の人たちが協力して「哲学と交流の山里」を創り上げ、活性化を図ってきた。

栗田さんは住民たちのモチベーションを高めるためにさまざまな工夫をした。例えば、共生のむら すぎさわのパンフレット類。住民が移っている写真には、必ず一人一人の名前が添えられている。特に集合写真などは普通一人一人の名前を載せているのはあまり見たことがないが、すぎさわのパンフレットではきちんと書かれている。これにはそれぞれの名前を出すことによって、自信を持ってもらおうという狙いがある。住民側からすれば、「自分もれっきとしたメンバーの一人である」という誇りが生まれるはずである。さらに栗田さんは住民一人一人の名刺をつくったりもしている。また、テレビや新聞の取材にも、住民を積極的に参加させた。宣伝効果もちろんあるが、住民に自信を持たせるという意味合い

のほうが大きかった。これらは他地区の活性化においても参考になる事柄であろう。そして、栗田さんのように音頭をとって住民の意識を向上させる役割の大切さもわかる。

また、栗田さんの活動の輪は杉沢地区内だけでなく、全国へ広がっている。

先述の通り、国産のメープルサップづくりを成功させた栗田さんは、1999年に「メープルサップ研究会」を設立。当時は地域単位での活動であったが、メープルサップ仲間の輪はやがて全国へ広がり、2008年には「日本メープルサップ アンド シロップ協会」へ改組。仲間との交流や情報交換を行い、日本産メープルシロップの基準づくりなども行っている。

さらに2008年6月にはメープルサップで醸したビール「楓酔（ふうすい）」が完成。カエデの樹液を発酵させたビールは世界初とされ話題になった。その希少性もさることながら、「楓で酔う」「楓酔」とは、なんとも洒落たネーミングである。その響きもよい。

他、外部への情報発信としては、東京・丸の内のレストラン「にっぽんの…」がある。「にっぽんの…」は全国各地の農業生産者や地域おこしグループなどが出資してオープンしたレストランで、栗田さんも運営メンバーとして参加。金山産の食材を使った料理を楽しむことができる。金山町のことを知らなかった東京の人にも、関心を持ってもらい、そして訪れてもらうことが期待される。また、交通の便がよい東京のど真ん中にあるので、地方から東京に訪れた人たちが立ち寄ることも考えられる。

こうした栗田さんの活動によって、多くの人たちとのつながりができていった。そして、その人脈により杉沢地区の取り組みや魅力が伝播していき、新たな訪問客を招いていったものと考えられる。

杉沢地区での活性化に向けて行ってきた事業は、暮らし考房を中心として、実にさまざまである。わずか12戸の小さな集落が、実に生き生きしたむらに見える。栗田さんの言葉で「自創自給」というのがあるが、ここに暮らす人たちはよりよい豊かな暮らしを自分たちで創り上げ、それを愉しみながら生きている。ただし、高齢化が進むにつれ、一部の活動ができなくなるということもある。「共生のむら すぎさわ」としての集落ぐるみの取り組みは、残念ながら平成24年で終了した⁵⁾。しかし、栗田さんは、今後も様々なアイデアで地区の活性化を支えていくことと期待される。

5. 結果

暮らし考房の事業構成のフレームワークを考察していく。
(図 5-1) そして、柳野の事業もこのフレームワークに当てはめて考えていく。

まず、暮らし考房では、事業を行っていく上での土台として、しっかりとした理念を持っている。暮らし考房の理念の定義は、「自分たちの自信、誇り、希望の礎となるもの」である。そしてそれは「本当に自分たちが送りたい地元ならではの生活」なのである。

そして、この理念をととも重視していて、より充実させるために、哲学者の内山節氏の講演を開いている。山里の人たちの豊かな暮らしとは何なのか、哲学の観点から考え、生かしていこうとしている。

その確固たる理念をもとに、自分たちの生活における得意技を展開している。つる細工体験、木工体験、草木染め体験、源流米づくり、民泊、国産メープルサップの開発、森林ボランティアガイドなど、住民それぞれが自分たちのできる得意なことをしている。それらに魅せられて多くの人が訪問するようになり、グリーンツーリズムとして成り立っている。

つまり、ここでのグリーンツーリズムは、お客さんが求めていることを行うマーケット・インの考え方によるものでは

ない。あくまでも、自分たちの送りたい杉沢地区ならではの暮らしをして、それを見に来たい人に公開する、という「暮らし・イン」というべき考え方で取り組んでいるのである。単にピザ焼き体験やそば打ち体験のような画一化されたことを行うのとは違って独自性が生まれ、注目されるようになったのだ。

マーケット・インではなく、あくまで自分たちの暮らしそのものを見てもらうというスタンス。中山間の地区活性化を行う上で、これは大きなポイントとなることであろう。訪問者が山里でしたいと思っていることを想定し体験などのプログラムをつくると、結果的にどこの地区でも似たようなことをしているようになり、差別化が図りにくくなってしまう。それぞれの地区ならではの、自分たちの送りたい暮らしをするというのが個性や魅力となる。

また、プロモーションについても、杉沢地区では特に目立ったことは行っていなかった。栗田さんが、メープルサップ研究会などの取り組みで築いた地区外の人との人脈が新たな来訪者をつくり出し、結果的にプロモーションとなっていたのである。

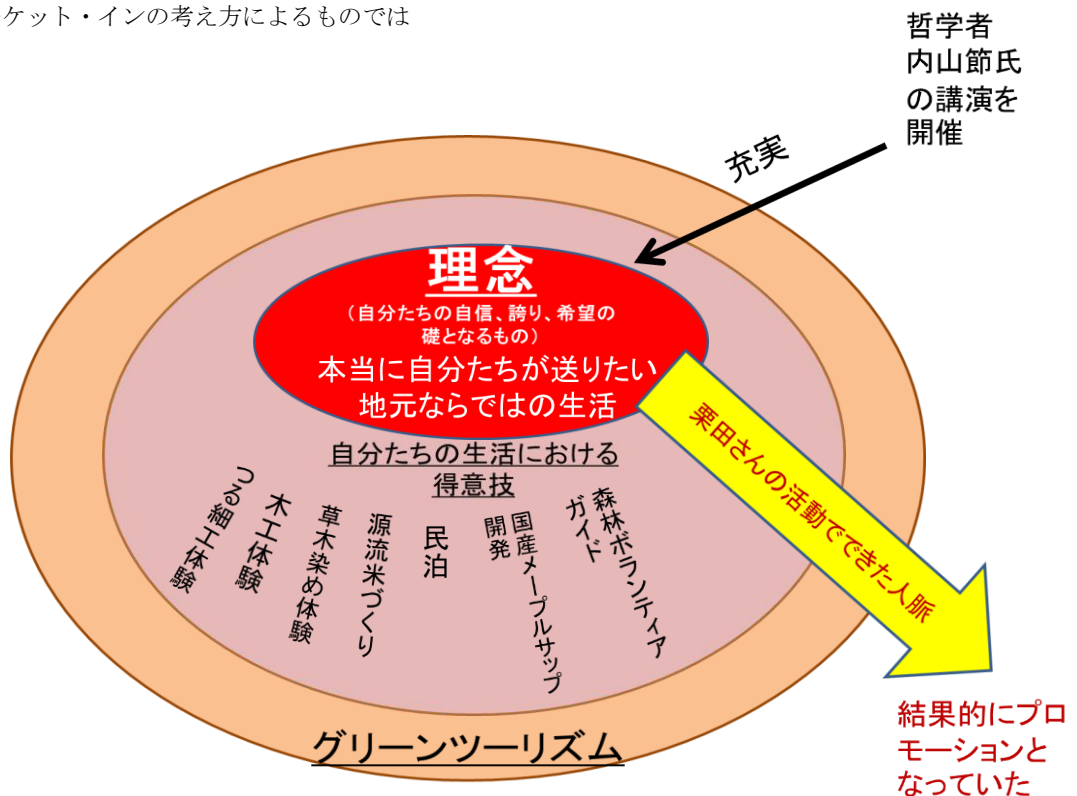


図 5-1 暮らし考房の事業構成フレームワーク

このフレームワークにもとづいて、柳野地区の事例を考察していく。(図 5-2)

まず、柳野での理念は「地区の持っている良さを推し進めていく」である。その「地区の持っている良さ」のひとつに特産品がある。よって、柳野が理念をもとに実行するのは、地域の特産品を活かしながら、新しい事業に挑戦していくことである。具体的にいうと、直売所(ふれあいの里柳野)の充実、猪肉処理場の新設及び猪肉製品の販売、和ハーブ園やコシアブラ園の新設である。

しかし、これらの実行案にはひとつの問題点が考えられる。それは、安定的に外貨を稼ぐための具体的な事業案が欠けている、ということである。現時点での案は、いずれも柳野地区の住民がやりたいと思っていることではあるが、成功する見通しがしっかりと立っているものとは言い切れない。もちろん「やってみないとわからない」という意見もあるが、限られた予算を有意義に使う必要もある。将来成功する見込みがあり、継続的に地区に経済的な恵みをもたらすことのできる、つまり安定的に外貨を稼ぐことのできる事業案をつくるのが大切なのである。住民の希望を重視しながらも、より現実的な案を考えていく必要がある。

また、柳野で事業を行っていく上でもうひとつの問題がある。それは、計画的なマーケティングを行っていく必要がある、ということである。

杉沢地区では、栗田さんが地区での取り組みの中心を担い、外部のさまざまな人々と接してきた。そこでできた人脈が新たな集客へとつながり、結果的にプロモーションとなっていた。だが、現在柳野でこうした活発な活動ができ、多くの人脈を期待できるような人物は残念ながらいないといえる。よって、柳野地区では、新たにプロモーションの方策を考えてやっていく必要がある。つまりここで必要な計画的マーケティングとは、プロモーションのことである。限られた予算の範囲内で、また高齢者が多い中でプロモーションを行わなければならないわけだが、そうした状況を踏まえながらも山里の柳野地区に効果的に人を集めるプロモーションの方法を見つけていく必要がある。

この計画的マーケティング(プロモーション)を行ってこそ、柳野地区でのグリーンツーリズムが成立することになる。

以上から、柳野地区での活性化においての問題点は、安定的に外貨を稼ぐ具体的な事業案が欠けているという点と、計画的なマーケティングの必要性がある点の2点となる。

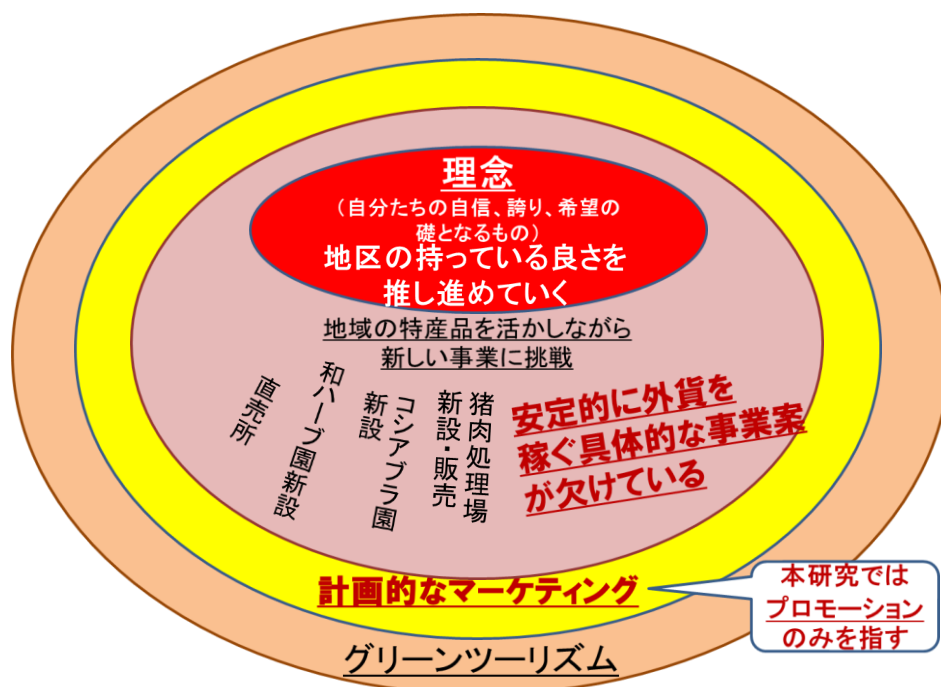


図 5-2 柳野地区の事業構成フレームワーク

6. 結論

本研究を通しての成果として以下のことが考えられる。

(1) 山形の「暮らし考房」の事例から、地区の活性化を成功させるための持続可能な事業案を立案する一つのフレームワークを抽出できた。

(2) そのフレームワークから、柳野の住民案を持続可能な案とするための問題点を抽出できた。

一方、今後の課題として次のことがあげられる。

・当事者である柳野地区の住民のレビューを受ける必要がある。

引用文献

- [1]高知県庁ホームページ：集落活動センターハンドブック,
<http://www.pref.kochi.lg.jp/soshiki/121501/syuraku-center-handbook.html>
- [2]金山町役場ホームページ：町のすがた 2013
http://town.kaneyama.yamagata.jp/docs/matinosugata2013_20130522.pdf
- [3]自然の恵みメープルサップと「哲学」で育む：日本森林技術協会
http://www.jafta.or.jp/13_sanson_hp/jirei/mori-yama/jirei25-1.html
- [4]山村に生きるカナビ！：暮らし考房・山形県金山町,
http://www.jafta.or.jp/13_sanson_hp/jirei/yamajikara/jirei34_2.html
- [5]山形県ホームページ：農林漁家民宿おかあさん百選「暮らし考房 栗田キエ子さん」,
<http://www.pref.yamagata.jp/ou/somu/020020/03/mailmag/special/selection100/kurita.html>